

Zoom Up

人

心の中のイメージを
自分らしく表現できる
そんな力が文章にはあるんです



伊藤 萌 さん

●いとう・もえ 西根中3年生。美術部に所属し、学級委員長を務める。欲しいものはポキャブラリー(言葉)。「影響されやすい性格」と自己分析する。好きな言葉は「われ以外、皆わが師なり」。担任の先生に憧れ、将来の夢は国語の先生になること。血液型A型のかに座。大更在住。



「夏の家で」と題したその詩は、毎年お盆になると遊びに行っている祖母の家でのことを歌っている。「ことしは受験生なので、頭の中は受験のことでもいい。せっかく遊びに行つた祖母の家でも、ほとんどくつろぐことができませんでした。そのとき感じたいつものお盆との違いを詩にしてみました。

文章と同じくらい絵を描くことも好きな萌さん。選挙ポスターコンクールで入賞したこともあるという。「文章も絵も、心の中を形にできるところが似ている。自分を表現できる」と魅力を語る。文章と絵、次はどちらの表現で一瞬を切り取るのだろうか。

トの端などに無造作に書きつづつていた言葉たち。いつでもどおりの生活の中にある一瞬に、多くのことを感じ、思いをはせる。普通なら通り過ぎてしまうその瞬間をあふれる言葉で彩り、詩の中に切り取つてしまう。感受性が豊かという言葉だけでは言い表せないその詩の世界。第11回少年少女の詩で最高賞の江間章子賞を受賞した伊藤萌さんの詩を読むと、そう感じずにはいられない。

「た」と詩を作ったときの情景を覚えてくれた。大人になっていく自分を、祖母の家で感じる違和感で表し、受験を控えた焦りや戸惑いを抱える今と、何にも縛られていなかた昔を、昼と夕方とのセミの鳴き声に重ねる。この詩を読み返すごとに、その情景が浮かび上ってくる。「完成したときは、結論のない詩という印象だった」という。祖母の家で浮かんだイメージを家に帰ってから詩につづつたため、完成まで時間がかかった。悩み、迷い、妹に読んでもらった。「妹にいいんじゃないと言ってもらえたことで、自信が持てました」と萌さんは胸を張る。夏休みの課題として書き上げた詩での受賞に「自分の心の中のことを歌った詩なので、みんなに読んでもらうのは恥ずかしかったけど、受賞はうれしい」と感想を聞かせてくれた。